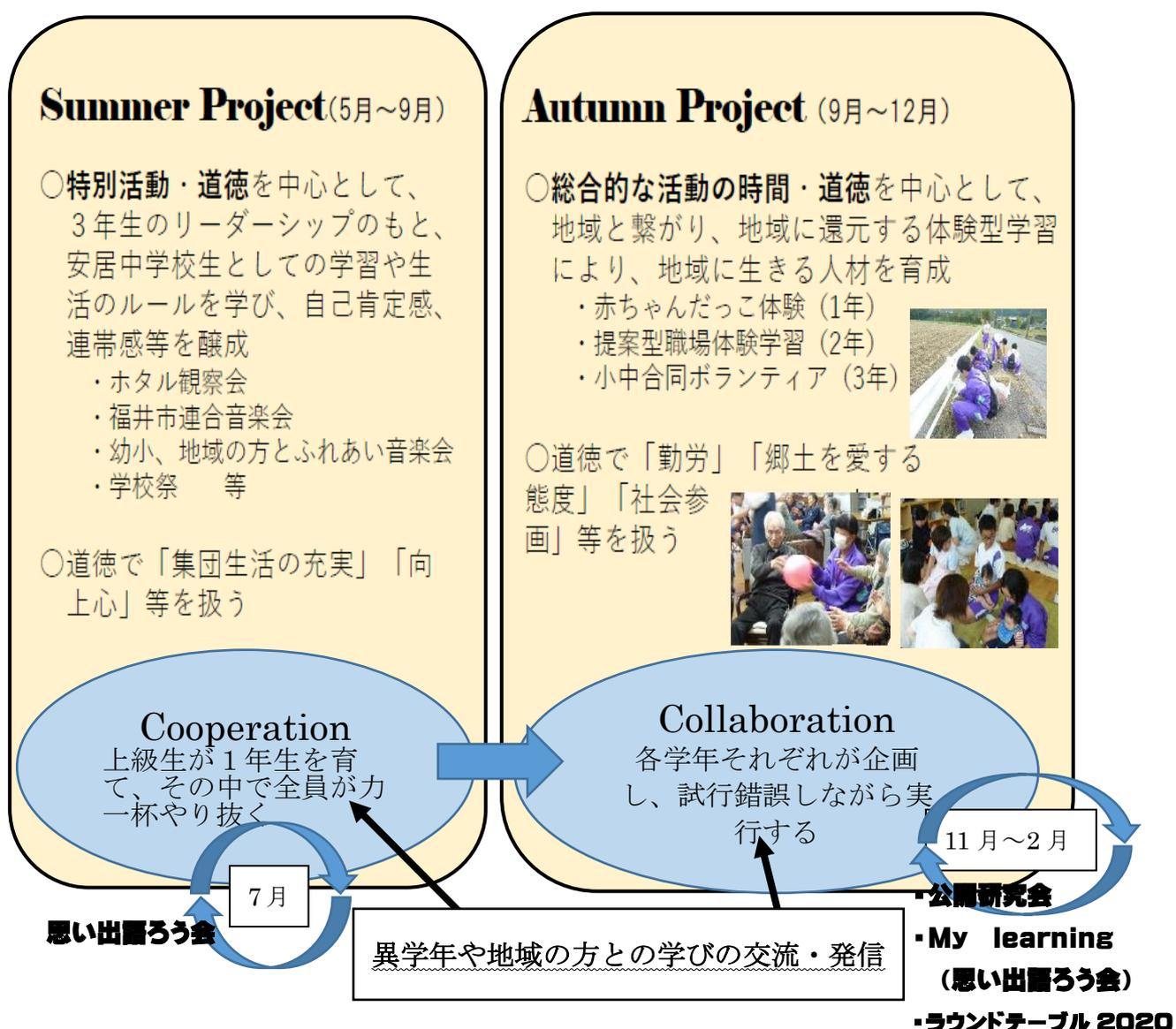


プロジェクト学習の概要

第1章 特別活動・総合的な学習・道徳の時間について

本プロジェクトは開校の理念である「社会参画型学力」の育成を図るために行っている。そのため、生徒自身が、協働して、考え、実行して振り返り、社会参画への手応えをつかめるよう生徒たちの手で組織する事を念頭に置いている。

そこで1年間を大きく2つのプロジェクトに分けて組織した。1つ目が5月～9月までを1つのスパンとした「Summer Project」。そして2つ目が9月～12月をスパンとした「Autumn Project」である。時期に応じて、総合的な学習の時間、特別活動、道徳を関連させ、生徒主体で探究的なロングスパンのプロジェクト学習を行った（下図参照）。今年1年間のそれぞれの活動を第2章、第3章で示していく。



(文責 川端 康誉)

第2章 Summer Project

Summer Project では3年生を中心に「連合音楽会」「学校祭」の成功に向けて2つの行事を中心としたプロジェクト学習を実践した。

1 連合音楽会に向けてのプロジェクト

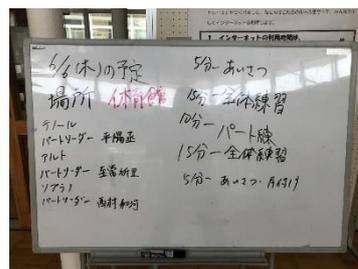
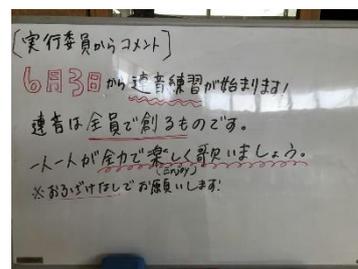
「連音を通して集団の力を育む」

→「自分たちに自信をもち、次の活動へのモチベーションを高める」

<3つの取り組み>

①3年生を中心とした生徒主体の取り組み

- ・連音実行委員会（メンバー：指揮者、伴奏者、生徒会執行部、音楽係）を設立し、実行委員長を中心に毎日の練習計画を立て、練習後はその日の振り返りを行い、次回の練習計画を立てるようにした。また、練習計画は風のひろばに提示し、他の生徒もあらかじめ分かるようにし、実行委員からのお知らせやメッセージなども併せて伝えられるようにした。
- ・学活の時間に連音をどう盛り上げていくか、クラス全体で話し合いの時間を設け、学年全体の連音に対する意識を高めていった。
- ・毎年太鼓の演奏は、希望者のみで実施していた。それもなかなか希望者が出ず、学年全体の取り組みとは、言いがたいものであった。そのため、今年は学年全員でやってみてはどうかと提案した結果、全員が賛同し、昼休みの自主練習なども積極的に取り組む姿が見られた。
- ・あくまでも生徒が中心に練習していくといった形を取っていくのだが、教諭はただ見ていだけでは、良い活動にはならない。そのため、教諭は気がついたことや改善点などを3年生の実行委員を通して、アドバイスという形で伝え、できるだけ3年生の意見として後輩に伝えるようにしていった。



実行委員からのメッセージボード

②道徳での取り組み

- ・各学年で連音に向けて、意識が高まるような内容を考え、実施した。
 - 1年生：6/6 「むかで競走」を実施。連音での1年生の目標を話し合い考えさせ、それを基に練習に取り組んでいった。
 - 2年生：6/7 自分が果たすべき責任について、クラスで話し合い、個人の目標、クラスの目標を考えた。
 - 3年生：6/6 「高い目標」について考えた。最上級生として何が出来るか、最後となるであろう異学年での合唱で何を頑張りたいのか考えた。

③地域・小学校をつなぐ取り組み（ふれあい音楽会 6/17 実施）

- ・連音で発表した曲を、地域の介護施設や保育園、小学生の前で発表し、自分たちがこれまで努力してきた姿をより身近な人達に見てもらうことで、満足感を得るような場を設定した。また、小学生達は、中学生達の演奏を聴いて今後の見通しを持ち、中学生達は小学生達の演奏を聴いて、自分たちの成長を実感し懐かしむ良い時間になったと考えられる。さらに、小学生達からの感想を聞くことで、自己有用感や達成感を味わえるようにしていった。
- ・地域の福祉施設のお年寄りの方や西安居保育園の園児達と、レクリエーションを通して、交流を深め、地域の方達に楽しんでもらえるためにはどうしたらよいかなど、地域における自分たちの役割を考える良い時間になった。



お年寄りとの交流



園児達とのレクリエーション

2 学校祭を成功させるプロジェクト学習

『生徒が主役』を意識して学校祭を成功させる」

→「生徒一人一人が役割をもち、3年生を中心に企画・運営していくことで、自己有用感や達成感を味わわせる。」

< 3つの取り組み >

①実行委員会の立ち上げ及び一人一役

学校祭を生徒が主体的に企画・運営していけるように生徒全員を「執行部」「劇」「ドリームコーナー」「応援リーダー」「応援パネル」5部門に分け、3年生をそれぞれの部門の実行委員（リーダー）として位置づけた。夏休みに入る前に部門会を開き、今後の活動の計画や、夏休み中の活動日の確認を行った。

本校では、人数が少ないため1人の生徒が何役もこなさなくてはならない。そのため、右の表のようにそれぞれの部門、教科係会などのスケジュールを掲示し、リアルタイムに調整・確認ができるようにしていった。

平成31年度 学校祭部門所属一覧

部門	1年1組(青組)	1年1組(黄組)	2年1組(赤組)	2年1組(青組)	3年1組(青組)	3年1組(赤組)
執行部						
劇	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 高橋 裕文	実行 木村 剛隆	実行 藤原 実	実行 藤原 実
	実行 高川 聖心	実行 土佐 悠一朗	実行 山口 陽己	実行 山崎 陽香	実行 藤原 実	実行 藤原 実
	実行 前田 勇治	実行 井野 康士	実行 石田 天晃	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実
			実行 中川 悠希	実行 中川 悠希	実行 藤原 実	実行 藤原 実
ドリームコーナー	実行 佐野 雄大	実行 橋本 悠希	実行 江守 博生	実行 坂井 拓斗	実行 山口 陽香	実行 前田 勇治
	実行 松田 義生	実行 橋本 悠希	実行 津川 新太郎	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実
	実行 中川 悠希	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実
	実行 坂井 拓斗	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実
応援リーダー	実行 山口 陽香	実行 藤原 実	実行 前田 勇治	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実
	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実
応援パネル			実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実
			実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実	実行 藤原 実

一人一役の組織表

②小学生へのアピール活動（9/3）

自分たちが企画した夢授業やコーナーにできるだけたくさんの人を呼びたいという声が生徒から上がった。そこで、小学校にPR部隊が出向き、小学生に対しそれぞれの見所など具体物を見せながらプレゼンする時間を設けた。その甲斐あってか、例年は中学生に兄弟がいる小学生

平成31年度夏季休業中 部門別・教科係会活動計画

日	時間	活動内容	担当者
9月3日	10:00-11:00	夢授業	藤原 実
9月3日	11:00-12:00	ドリームコーナー	佐野 雄大
9月3日	13:00-14:00	劇	藤原 実
9月3日	14:00-15:00	応援パネル	藤原 実
9月3日	15:00-16:00	応援リーダー	藤原 実

夏休みの活動計画表

の参加者がほとんどであったが、今年は兄弟のいない小学生も20名以上見られ、PR活動の成果は大きかったと感じた。

③中間評価を取り入れた振り返り活動（9／3）

本年度は夏休みが明けてから学校祭まで約2週間の期間があったため、例年よりゆとりを持って活動できた。そこで、1週目が終わった時点で現在の取り組みがどうであるか自己評価を行った。これからの活動を軌道修正したり、学校祭が終わった後の自己評価と比較しながら、自己の変容を確認できた。



小学校へのPR活動の様子

（文責 立山 泰伸）

第3章 Autumn Project

Autumn Project は、総合的な学習の時間と道徳を中心として、地域とつながり地域に還元する体験型学習を念頭に置いて進むことになった。

1 プロジェクトの核

プロジェクトの核として

- ①生徒が主役
- ②地域に根ざした活動

の2つを生徒、教諭ともに活動の核としておくことにした。その背景には7月に行った「思い出語ろう会」にあった。本校では、学びの振り返りのために「思い出語ろう会」を年2回行っている。しかし、1回目の活動では、やったことを述べるだけでそこに「学び」を示すものがほとんど見られなかった。そこで、会の最後に、生徒全体に「学び」を意識して活動をしているか問う時間を作った。そうすると、ほとんどの生徒が意識していないに手を挙げたのだ。さらには「やらされている」「特に考えていない」という意見も多く聞かれた。そこで、分かりやすく、且つ生徒が作り、地域に還元する活動にしたい思いを込め、この2つを核に据えることとした。

2. 活動の見える化

本活動では、「見通し」「活動の趣旨」の2つを意識するため見える化を行った。

まず、「見通し」だが、これは教師も生徒もどこを目指して活動を行っているのか明確にすることから始まった。生徒、教諭それぞれに右の図1を提供した。生徒にはパワーポイントでオータムプロジェクトの趣旨説明を。教諭には、オータムプロジェクト通信という紙面と職員会議を利用して伝えた。職員もこれについて議論し、全体で共通理解を果たせたことで全ての活動がつながったように感じた。

次に「活動の趣旨」の見える化である。「今自分達がどこを向いていて、何のためにやろうとしたのか。」また、「何を学んで、次は何をしないといけないのか」が曖昧になりがちなので、学びの足跡を掲示板にまとめることとした。個々のポートフォリオでは、生徒間、学年間での共有ができないので、掲示板で誰でも見られるようにしていった。しかし、本校の掲示板は堅すぎてなかなか画鋲が刺さらない。そこで、大きな紙に活動ごとのまとめを貼っていき、活動全体が終わったら掲示板に貼ることとした。それまでは、教室横の白板を利用

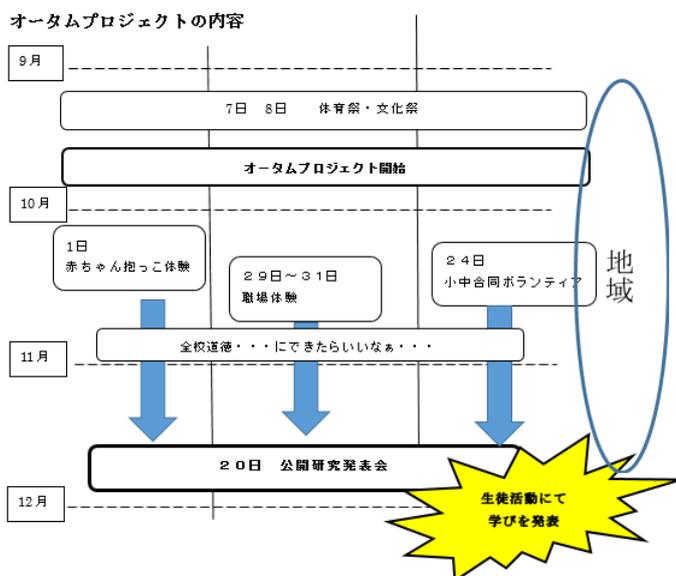


図1 オータムプロジェクトの流れ

してまとめていく。掲示板の使い方について次のように工夫した。

掲示板の使い方

- ・振り返りは、各活動のまとまりで書く。
- ・書く内容は広くとる。学んだこと、次に生かしたいことの2項目で、A4の1/4の大きさの紙を使用字数制限なし。全学年共通で使用する。
- ・書いたら生徒が自分ではる。
- ・同じ掲示板を3年間通して使う。上からどんどんはっていき、昔の活動を他の学年も見られるようにする。

上記のように改善することで、生徒の意識改革と掲示板の有効活用につながると考えた。学年掲示板は図2を参照。

3. 3年間を通したテーマの設置

掲示板の活用に伴って、3年間のテーマをつくることとした。そのテーマを突き詰めていくことで、プロジェクト型学習になるのではないかと考えたからだ。既にプロジェクトを進めている2、3年生に関しては、今までの目標を踏まえ、設定し直した。各学年の目標は以下の通りである。このテーマを芯に置きながら、各学年のプロジェクトが始動した。



図2 学年掲示板

1年生

(地域を) 発信・核・感謝

2年生

地域に生きる人材になるための力を養おう

3年生

伝える

4. 各学年のプロジェクト

- ・赤ちゃんだっこ体験 (1年)
- ・提案型職場体験学習 (2年)
- ・小中合同ボランティア (3年)

各学年が「生徒が主役」「地域に根ざした活動」を念頭に上記の活動を行った。詳しい活動内容は、各学年のページをご覧ください。

5. 全員参加型ポスターセッション

オータムプロジェクトのまとめとして公開研究会での生徒活動として、「全員参加のポスター発表」を行った（図3）。活動の内容をA0のポスター用紙に2～3人でまとめ学校の教諭を含む一般の参加者に向けて発表した。独特の緊張感の中、全員が台本なしで発表に挑んだ。生徒たちの感想からは、「初めての体験でとても楽しかった」「参加者の方がたくさんアドバイスをくれてためになった」等の手ごたえを感じる感想が多く聞かれた。非常に価値のある時間になったように感じる。



図3 公開研究会の様子

6. 「My learning 2020」1年間のまとめの学習として

2回目の「思い出語ろう会」について生徒会で話し合いがもたれた。この話し合いには、教諭の意向が入らないように参加せず、後ほど報告を受けることとした。まず、第1回目の「思い出語ろう会」の反省から始まった。出てきた反省は図4の通りである。そもそも「タイトルがおかしいのではないか」というところに議論の中心が置かれた。

「思い出」を語るというタイトルがやったことだけをただ話していた今までの活動につながっているのではないか

というのだ。この意見は以前1回目の「思い出語ろう会」の後にも個別で私のところに3年生も言いに来たことがあった。それぞれ核心を突いている。その後の話し合いで、2つの案が出てきた。「My learning」と「Memories」である。その後、今年は「学び」を意識して活動を進めてきたという生徒会副会長の意見を主軸に「My learning」に決定した。しかし、この2回の「思い出語ろう会」は、それぞれの意味合いが違うのではないかという1年生の意見が出てきて、話が盛り上がってきた。1回目は来年度に行われるから自分達が決めてしまうのはおこがましいという意見から、2回目のみサブタイトルを決めることとなった。話し合いの中でも生徒会のメンバーの思考を大きく揺さぶる意見になったのが「2回目は来年に向けての総まとめ」ではないかという意見である。そこから「再出発」や「省みる」など多くの意見が出た。それらの意見をまとめて付けたのが「Restart」である。再出発の意味を込めたこの言葉が彼らにはどうやらしっくりきているようであった。ここから

「My learning 2020 (Restart)」が始まった。この後、自分達の考えをまとめて、教諭には職員朝礼に参加して提案し、生徒には集会の時間を使って趣旨説明を行った。「My learning」のやり方は図5の通りである。

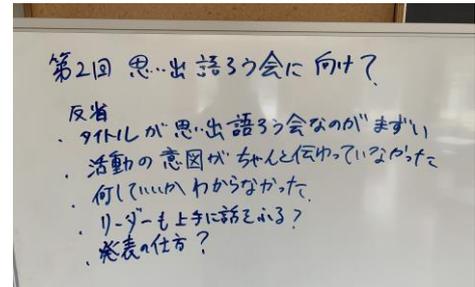


図4 思い出語ろう会反省

- ・ A4の紙に公開研究会の時と同じようにまとめる
- ・ 1班5～6人
- ・ 1人発表時間は10分
- ・ 地域の人にも聞き手として入っていただく

図5 「My learning」のやり方

2月10日のマイラーニング当日は、地域や保護者の方を15名ほど招いて、発表を行った。各テーブルに1名以上の地域の方に参加していただくことができた。小学校1年生から今までずっと同じメン



図6 My learning 2020の様子

バーで過ごしてきた彼らにとって新しい価値観や緊張感を感じられる時間になった。感想でも、「中学生にはない新しい考えを知ることができた」「いつも話す相手とは違う人に来てもらえて楽しかった」などの感想が聞かれた。また、ポスターも上手にまとめてあり、特に3年間「伝える」をテーマに活動してきた3年生のポスターと発表はとても面白く、聞く人を惹きつけていた。(図7)

また、2月15日に福井大学で開催された実践研究ラウンドテーブル2020にもこの中から14名が参加し、10ブースのポスターを発表した。より多くの人との関わりの中で、自分達でここまでやれるのかという実感と地域を発信していく手ごたえを感じたのではないかと考える。現に、発表を終え、次の日学校で参加した生徒が、「昨日のめっちゃ勉強になったよ。参加すれば良かったのに」と他の生徒に話していたのが何よりの証だろう。



図7 3年生が書いたポスター



図8 実践研究ラウンドテーブル2020

第4章 振り返り

今回、年度の途中から始まったこのプロジェクトだったが、進める中で輪郭がしっかりしてきた。今回の内容を次年度にしっかりつなげ、4月初年から3年間を見越したうえでロングスパンのプロジェクトづくりを行っていきたい。その中で、より簡略化できるものは簡単にし、シンプル且つ深いプロジェクト型学習を行っていきたい。そのためには、生徒自身の意識向上と同時に教諭同士の意識の統一を行っていく必要がある。新年度からまた新たなプロジェクト学習が幕を開ける。生徒たちがどのようなプロジェクトにし、私たち教諭がどのように関わっていけるのか、とても楽しみである。

(文責 川端 康誉)